

女子大学生のライフコース設計教育の課題と展望 —「人生すごろく」作成の試みより—

坂本 麗香

Problems and Prospects of Life Course Design Education for Female College Students: From an Attempt at Making “Game of Life”

Reika SAKAMOTO

1. はじめに

日本社会において、少子高齢化に伴う労働者人口の減少時代における持続的成長の維持のための必要条件として、女性の活用は近年の重要な課題と認識されている¹。2011年の大学設置基準の改正による、大学および短期大学における正規授業としてのキャリア教育の義務化も受けて、女子大学においても、キャリア教育はその重要性をいっそう増している。

本研究では、キャリア教育の方法の一つである、人生すごろくの作成に着目する。著者の勤務する女子大学の学生が履修するキャリア関連科目で実施した課題「人生すごろく作成」の結果内容の分析に基づいて、女子学生の自身のライフプランに対する展望の特徴を考察するとともに、人生すごろくと並んで、自身のキャリアの将来像を考えさせる代表的な教育手法の一つである人生年表作成と比較して、この手法の教育方法としての意義と発展について検討する。

2. 先行研究

(1) 女子学生とキャリア研究

女子学生に焦点を合わせたキャリア研究は、1970年代から蓄積されてきた(増田、1973：神田、1971)。それらは、①女子学生(卒業生を含む)の就業に対する意識(キャリア観)に関するもの、②女子学生へのキャリア教育のありかたに関するもの、の2つに大別される。初期の研究では①が多く、現在まで多くの研究がなされている(田澤、2005：西川、2013：井上、2014)が、キャリア教育の重要性が認識され、各教育機関での実践が重ねられる中で、②についてもより研究が積み重ねられてきた(井上、2008：宇田、2009：長田・藪田、2014)。しかしながら、その成果については、様々な社会制度や経済状況等にも影響を受けることもあり、いまだ道半ばといった印象である。今後も、ダイバーシティ(多様性)マネジメントやワークライフバランスなど様々な関連する課題における議論の高まりとともに、より有効なキャリア教育方法の探求が望まれる。

(2) キャリア教育における人生展望に関する教育方法

坂本(2014)で指摘した通り、学校現場におけるキャリア教育において、人生を長期的かつ包括的な視点で学生自身に考えさせるための方法として、「人生年表」と「人生すごろく」がある。とくに「人生年表」の作成は、キャリアカウンセリングの分野で伝統的に使われてきた。

「人生すごろく」は、斎藤他(1999)によって、「従来の家庭科教育で前提とされていた『結

婚や年齢に基づくライフステージ』にとらわれず、自由な発想で主体的に多様なライフコースを考えることで長期の生活設計を考えさせる」ことを目的として提唱された。そこでは、高校生の家庭科教育の中で、個人で「人生に影響を与えると思われる出来事」を書き出したうえで、4人1組ですごろくを作成している。すごろく作成を通じて長期的な生活設計について考えさせたいうえで、ライフイベントに対する経済計画や自己決定能力、職業観の育成などと連動させることでより有効性が高まると論じている。これをうけて、永田（2008）は女子短大生、渡邊（2014）は大学生（性別は不明だが、共学の総合大学で実施されているため、男子大学生が相当数含まれていると推測できる）に対して、それぞれ人生すごろくの作成に取り組み、教育効果を求めるとともに、実践的なキャリア教育の課題を描こうとした。作成されたすごろくのイベント項目の内容分類に基づき、齊藤他（1999）と上野（2002）では男女高校生のライフコース展望の特徴を、同様に永田（2008）では女子短大生のそれを描いている。

(3) 「人生すごろく」と「人生年表」

人生すごろくと人生年表の共通点は、作成の過程で、自分の将来像について理想を織り込みながらシミュレーションできることである。坂本（2014, 2015）では、人生年表の作成を通して、女子大学生、女子短大生が考えるライフプランを分析するとともに、キャリア教育における、人生年表作成の意義と発展の方向性について検討した。そこでの発見事実のひとつとして、人生におけるマイナスなことをほとんど考えていない、ということがあった。「頑張れば叶うかもしれない、理想のキャリアプラン」というテーマであったため、そのような傾向になるのはやむをえないであろう。人生すごろくは、すごろくというゲームの性質上、人生にはマイナスな出来事も発生すること、人生に複数の選択肢があること、困難な状況になった後も復活できること、などを作成の途中で発想しやすいという教育効果が期待できる。

3. 調査の実施

(1) 本研究の着目点

既存研究にみられるように、大学を含めた学校教育現場において、学生に人生を長期的な視野で考えさせる様々な方法が授業で展開されている。しかしながら、実践報告が増えている一方で、その内容分析や教育効果の検証がなされた研究の蓄積はそれほど多くない。

そこで、本研究では、四年制学部的女子大学生による「人生すごろく」の作成を通して、既述のような教育効果を目指すと同時に、彼女たちの「女性のキャリア」への認識の特徴を描くとともに、女子大学生に対するキャリア教育実践内容の課題と教育効果を高めるための改善提案を探索することを目的とする。

(2) 実施方法

筆者が担当する生活設計を主要テーマとした授業の最後に、授業内課題として「人生すごろくの作成」を実施し、その記述内容をもとに分析した。課題の実施方法は以下のとおりである。

- 内容： ①有名な玩具「人生ゲーム」のイメージで、自分をテーマとした「人生すごろく」を作成する。
 ②スタートは大学2年生の春とする。ゴールは各自が自由に設定する。
 ③オリジナルのタイトルを付ける。

体裁： A3用紙で1枚。学生が持参した筆記用具を使用して作成した。

課題の内容分析の方法としては、女子短大生に「人生すごろく」の課題を与えた永田（2008）に倣った。また、課題作成前の準備として、ライフイベントに関するワークを授業内で実施した。ワークの実施手順として、（1）今後こんなことが起きたら人生に大きな影響が出そうだと思う出来事（ライフイベント）を予測して思いっただけ書き出す、（2）ライフイベントを4人1組のグループで持ち寄り、①偶然に起こることで起こってほしいライフイベント、②起こってほしくないライフイベント、③自分の力で達成したい、やってみたいライフイベント、④自分の力で状況を軽減できそうな、避けたい、やりたくないライフイベント、の4つに分類する。

ただし、永田（2008）では、（1）（2）ともに個人で作業したうえで、すごろく作成はグループで行っていた。本研究では、（1）は個人でおこない、それを持ち寄って（2）はグループで作業を行ったうえで、すごろく作成は個人で行った。その理由としては、いったんグループで作業することで個人での発想を超えた視点があることに気付かせより豊かな知見を得たうえで、最終的にはグループではなく個人ですごろく作成に取り組むことで、学生一人一人の価値観が現れたものとなると考えたからである。

（3）調査対象

家政学部家政経済学科専門基礎科目「生活経営学」を履修する1年生62人。この科目は1年生対象の必修科目である。

（4）課題作成時期

2014年2月上旬に行われた集中講義（15回（1回90分）中前半の10回、合計2日を筆者が担当）の最後に実施した。1日目に、2日目の後半で課題として作成することを告知しておいた。2日目、第7回の授業でライフイベントに関するワーク実施、第8回の授業を人生すごろくの課題作成にあてた。第9回の授業はDVD視聴として、未完成の者は並行して作成したことで、第10回の授業で全員が提出できた。完成品の例を図1に提示する。

4. 調査結果

完成した人生すごろくの記述内容の特徴を以下にみていく。なお、すごろくの記述内容を分類する際、一つのマスに分類の対象となる単語が複数含まれているとき、恣意的な判断を防ぐため、それぞれの単語を別に計測した。そのため、のべマス数はすごろく上のマス数とは異なっている。

（1）大学卒業までの生活

表1のとおり、総すごろく数（62）のうち、半数以上のすごろくに記載された内容が、単位取得・進級・卒業（48）、アルバイト（41）、旅行（35）、恋愛（34）、就職活動（34）であり、のべマス数の上位5つも同じである。クラブ・サークルとボランティアがあわせて19と少なく、これは調査対象の本学学生が女子大学に所属しており、クラブ・サークルの数もそれほど多くないことが理由だと思われる。また、留学（すごろく数10）、資格取得（同27）もそれぞれそれほど多くない。課題を作成したのが1年生の春休み前という、大学生活に慣れる一方で進路

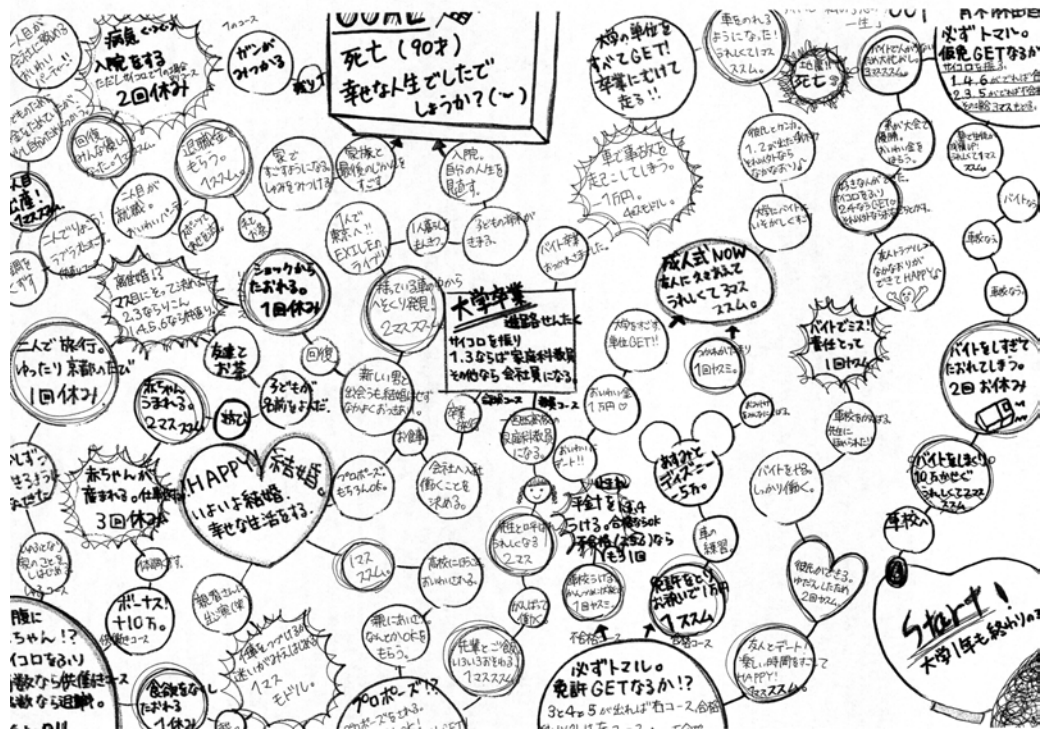


図1 学生が作成した人生すごろくの例

決定には遠い中だるみしやすい時期だったことも影響したのであろうが、時間的余裕のあるこの時期だからこそ、学生が何かに取り組むモチベーションを向上させる余地と必要性がうかがえる。

表1 大学卒業までの生活に関するイベント

	すごろく数	のベマス数
総すごろく数	62	
恋愛	34	95
家族	6	8
友人	16	25
単位取得・進級・卒業	48	84
教職	8	9
留学	10	10
趣味・娯楽	27	55
買い物	5	5
クラブ・サークル	17	38
ボランティア	2	2
アルバイト	41	71
芸能活動	1	1
美容	8	11
臨時収入・貯金を増やす	18	21
借金・お金をなくす	5	7
旅行	35	54
病気・事故	24	40
資格	27	39
就職活動	34	77
起業	1	1
結婚	2	2
運転免許・車	12	16

(2) 進路・職業・就業形態

表2より、結婚に関する記述および就職に関する記述は、ほとんどのすごろくにみられた（それぞれ、62と60）。職種が記載されていたもののうち、会社勤務28、専門職17、教職13、公務員7、自営業6、芸能活動2であった。就業形態に関しては、産休・育休に関する記述が12、再就職に関する記述も9のすごろくで見られる一方で、専業主婦のマスがあったすごろくも10存在している。

仕事・職場に関するプラスの内容がすごろく数31、マス数53の記載があるのに対して、仕事に関するマイナスの内容がそれぞれ23と36しか記載がない。すごろくというマイナスな内容も想定しやすい課題であるにもかかわらず、仕事や職場という自分にも理由があり得る場面でのマイナスな要素はあまり具体的に思い浮かべにくいようであった。

表2 進路・職業・就業形態に関するイベント

	すごろく数	のベマス数
総すごろく数	62	
1) 大学卒業後の進路に関するイベント		
進学に関する記述	3	3
留学に関する記述	1	1
就職に関する記述	60	62
無職／フリーターに関する記述	7	7
結婚に関する記述	62	66
2) 職種に関するイベント		
「企業／会社」	28	33
芸能活動に関する記述	2	2
アルバイトに関する記述	7	7
教職に関する記述	13	14
自営業に関する記述	6	6
公務員に関する記述	7	7
専門職に関する記述	17	22
専業主婦	10	11
3) 就業形態に関するイベント		
転職に関する記述	10	10
転勤に関する記述	2	3(夫の1を含む)
失業に関する記述	7	7(夫の3を含む)
退職に関する記述	29	37(夫の2を含む)
産休／育休に関する記述	12	18
再就職に関する記述	9	11
昇進・降格に関する記述	16	21(夫の7を含む)
給料・収入に関する記述	19	31
仕事に関するプラスの内容	31	53
仕事に関するマイナスの内容	23	36

(3) 家庭生活と就業形態

すごろくで選択しうる全てのルートにもとづいて、家庭生活と就業形態のマス¹の記述内容(イベント)の関連をみたのが表3である。なお、途中でルートが止まってゴールまでたどり着けなくなっているものについては計測から除外している。

もっとも多いルートが、就職—結婚／出産(結婚または出産の後に就業に関する記述が一切ない)であり、全ルートの1/3にあたる36存在する。「専業主婦」と明言しているマス数は11なので、記載されていないだけで就業を継続している、またはパートなどで再就職している可能性も含まれてはいるが、その後に就業に関する記述が一切ないということは、働いているとしても自分の就業についてそれほど重きを置いていないと言えそうである。「結婚／出産の後も就業継続」が23、「就職—結婚／出産—再就職」が9で、二つを合わせても34にとどまった。「結婚・出産の後も就業継続」の中には、「仕事と育児の両立で悩む」といった記述も3ルートであった。日本人女性の平均初婚年齢²を考えると、学生たちが実際に育児に本格的に直面するのは課題作成時から10年近く先になる可能性が高いにもかかわらず、自分たちが働きながら育児をすることには困難が伴うと考える学生が相当いることがわかる。また、「一度も結婚しない」ルートは20あったが、離婚するルートは全部で11であった。一般に言われる「女性の1/10は生涯未婚、結婚するカップルの1/3は離婚」に比べると、生涯未婚の可能性は高く、離婚する可能性

はかなり低く認識されている。生涯未婚の場合はほとんどのケース（18）で定年（自営の場合
は定年頃の年齢）まで就業を継続していた。

表3 家庭生活と就業形態に関するルート

総ルート数	108
結婚／出産のみ	2
結婚／出産－就職	1
結婚／出産－離婚－就職	1
結婚／出産－就職－離婚	1
就職－結婚（出産なし・仕事継続）	6
就職－結婚－離婚	2
就職－結婚／出産（結婚／出産後に就業が出てこない）	36（結婚または出産がゴールの4を含む）
就職－結婚／出産－仕事続ける／復職	23
就職－結婚／出産－再就職	9
就職－結婚／出産－離婚（再就職なし）	4
就職－結婚／出産－離婚－再就職	1
就職－結婚／出産－離婚－再就職－再婚	2
就職（仕事のみ）	20

（4）恋愛・結婚・子の誕生

恋愛・結婚・子の誕生に関するイベントの登場順序のルートについて示したものが表4である。のべルート96のうち、結婚前に妊娠が判明するのは2ルートのみにとどまった。

日本の現状としては、2004年の調査において、いわゆる「授かり婚」の割合は、15歳から19歳では82.9%、20歳から24歳では63.3%、25歳から29歳では22.9%、30歳以降で約一割となって

表4 恋愛・結婚・子の誕生に関するルート

総ルート数	96
1) 恋愛から始まる	
恋愛 結婚	10(結婚がゴールの3を含む)
恋愛 結婚 出産	40(出産がゴールの1を含む)
恋愛 結婚 離婚	3
恋愛 妊娠 結婚 出産	1
恋愛 妊娠 結婚 出産 死別 再婚	1
2) 見合い・婚活から始まる	
見合い 結婚	2
婚活から始まる	
婚活 結婚	1
婚活 結婚 出産	1
3) 結婚から始まる	
結婚	1
結婚 妊娠 出産	6
結婚 妊娠 出産 離婚	1
結婚 出産	5
結婚 出産 離婚	1
結婚 出産 離婚	1
4) 子の誕生から始まる	
妊娠 結婚 出産	2
5) その他	
独身	20

おり³、学生たちの未来予想はこの実態とはかなり乖離があるように思われる。しかしながら、「授かり婚」について、生活トレンド研究所の意識調査⁴では、20代独身女性の45.5%が否定的意見、28.6%が肯定的意見だったのに対して、30代独身女性では肯定的意見が33.0%、否定的意見が32.1%と逆転している。妊娠についてのタイムリミットが近づく30代女性の方が授かり婚に対して寛容であり、20代女性のほうがモラルを重んじているのである。本調査の対象学生は19歳前後であるため、よりいっそうその傾向が強くと考えられる。

(5) 家族関係・家庭生活

大学卒業後の家族関係・家庭生活に関するイベントについて示したものが表5である。全すごろく数62に対して、子どもの記述があるのはすごろく数57、のべマス数237で飛びぬけて多い。子どもは大人に比べて、学校への入学など、大学生が自分の過去を基にイメージしやすい成長過程でのイベントが多く発生することも理由の一端だが、子どもへの興味関心がとても強い傾向が見てとれる。

表5 家族関係・家庭生活に関するイベント

	すごろく数	のべマス数
総すごろく数	62	
1) 家族関係に関するイベント		
結婚	59	62
離婚	11	11
再婚	2	2
親	13	31
配偶者	36	74
子ども	57	237
きょうだい	1	1
祖父母	2	3
孫・ひ孫	19	26
家族	3	3
ペット	7	9
2) 生活に関するイベント		
恋愛	33	75
婚活	6	9
友達	13	22
宝くじ／賭け	14	16
くじ以外の臨時収入	9	12
事件／事故	20	34
病気	41	97
旅行	43	84
趣味・娯楽	29	60
買い物	30	59
美容	10	15
家の取得	31	35
引っ越し	14	18(老人ホーム入居の5を含む)
借金・貯金が減る	15	17
年金に関する記述	2	2
自分以外の死	14	17
失業／倒産	6	10
災害	5	5

結婚以外のマスで配偶者の記述があるのはすごろく数36、マス数74である。それらに、自分の親と孫を含めると家族関係に関するほとんどのマスが占められており、祖父母や兄弟のマス数はペットの記述回数よりも少ない。

イベントとしては、病気と旅行のマス数がとくに多い。病気は、インフルエンザや腰痛など、比較的軽微なものから、仕事のストレスによる鬱病、生死にかかわる重篤なものなど、内容にかなりばらつきがある。人生ゲームを作成するという課題の特性上、大学卒業までと同様に、宝くじなどの一攫千金、事件や事故、大きな災害等の波乱万丈な出来事が多く記載されていた。

結婚前の段階では、恋愛も彼女たちにとって大きな関心事項となっている。「友達が結婚する」のマスで、「3回休み」「(自分の持っている)500ポイントダウン」「ふりだしに戻る」といった指示があるすごろくが複数存在していたのが興味深い。彼女たちにとって、友達の結婚は相当なダメージを受けえるものとして認識されているようである。

5. 考察

(1) すごろくの内容に関する全体的な特徴：人生年表との共通点と相違点

女子大学生が作成する人生年表と人生すごろくには、以下のような共通点が見られた。

- ① 一般的な幸せなコース（結婚して出産して離婚しない）を考える率が高い
- ② 仕事を辞めて家事・育児に専念することを喜び、楽しみと考える
- ③ マイナスな出来事に対する対応、防ぐ方法までは考慮されていない
- ④ 配偶者のことよりも圧倒的に子供のことが多い
- ⑤ 両親、祖父母など、自分の前の世代に関してはほとんど記述がない

いっぽうで、両者にはいくつかの違いも見られた。人生年表との相違点は以下のとおりである。

① マイナスな出来事の頻度が多い

火事、盗難、災害、倒産など、きわめて偶発的で自力で回避の難しいマイナスな出来事の発生頻度が人生年表に比べて格段に高い。また、より発生確率の高い内容、たとえば坂本(2014)で女子大学生が作成した「人生年表」では皆無だった、収入減、リストラ、マイホーム購入によるローン返済の苦勞、なども見られた。年表は「自分の理想の人生」を描いたためマイナスな出来事はほとんど想像されていないが、すごろくではゲームの性質上、人生の状況を大きく変化させるような出来事が盛り込まれやすいからである。そのため、マイナスな出来事の発生頻度は高くなっているが、それはゲーム性を高めるという目的によるところが大きく、たとえ「○山△子の人生ゲーム」とタイトルがついているものでも、本当に自分にその出来事が降りかかりうるとは作者自身も想定していない可能性がある。

② 離婚、独身コースの設定は多い

人生すごろくのイメージとして有名な玩具「人生ゲーム」を例に出したこともあり、多くのすごろくが「人生における選択」を意識した分かれ道を設定していた。そのため、人生年表ではほぼ皆無に近かった「生涯独身」「子どもなし」「離婚」などのルートも多くのすごろくで見られた。それでも、「自分が考える自分自身の人生ゲーム」であるため、幸せな人生へのバイアスがかかり、それらのことを一切考えないものも相当数存在していた。

③ 友達など周辺事象に関する記述は多い

人生年表では、自分の家族・親族以外の人間についての記述はほぼ皆無だったが、人生すごろくではかなりの量の友達に関する記述がみられた。また、友達以外にも、グルメ、コンサート・観劇、職場での人間関係など、年表には見られなかった様々なジャンルに関する記述が含まれていた。これは、作成するすごろくの魅力を高めるため、それぞれのマスでの記載内容が同じにならないようにするという配慮が働いた可能性がある。しかしながら、年表には表れにくい、彼女たちの興味関心領域を幅広く体現したといえる。

④ 含まれる記述の量と内容の個人差が大きい

人生年表では、最後は必ず自分の死で終わっていたが、人生すごろくでは、学生の自由な発想を重視してあえてゴールの設定を各自に任せたとこ、自分の死去、幸せな老後、結婚、出産、など、多岐にわたっていた。また、総マス数やマス内の記述のしかたも、人生年表での記述年齢の数や記述量よりばらつきがきわめて大きかった。

(2) 人生すごろく作成の意義と問題点：教育ツールとして

以下では、人生すごろくの作成という課題そのものについて、教育ツールとして、およびライフコースへの展望や職業観・家庭観などの実態調査ツールとしての意義と問題点を検討する。

教育ツールとしての意義は、何よりもまず、ゲームを作る過程での楽しさと創造性である。さらに、人生年表では描かれにくいような、マイナス要素を含めた人生イベントへの想像力が高まること、複数の選択肢を用意して一つずつについて考える、後戻りややり直しもできるなど、一直線以外のルートがあることにも気づく、といったことが期待できる。

いっぽう、いちばんの問題点としては、マスの内容やルートなどを一から決める必要があるため、書き直しも多く、きわめて時間がかかることが挙げられる。また、すごろくの内容を構成する力に加えて、文章表現力、絵や字の上手さなども、完成時間に大きな差となって現れるため、個人の力量差が大きく完成度に反映される。提出された完成品の中にも、ルートが別れているのに選択の条件が書かれていないなど、すごろくゲームとしてのルールを満たしていないものも一定数存在した。

(3) 人生すごろく作成の意義と問題点：実態調査ツールとして

人生すごろくを、人生設計の実態調査ツールとして使用することの意義としては、悪いこともある程度考慮に入れた内容であること、家族や仕事以外も含めた興味の方向性がわかること、であろう。しかしながら、実際にすごろくの記載内容の分析を進めると、むしろ以下のような問題点の方が浮き彫りになった。

① 人生設計に関する「興味関心の傾向」を見るにとどまる

人生すごろくの作成においては、ゲーム性を重視するため、プラスでもマイナスでも、大きな出来事(「宝くじにあたる」や「自宅が火事になる」など)が描かれやすい。「人生にはこのようなことが起こり得る」ことを学生が認識するには価値があるが、自分の理想でもなく、現実として想定している姿でもない、一般論かつ発生確率の低そうな事象が多くすごろく上には出現する。そのため、すごろくでの記載内容の分析は、作成者自身のライフプラン展望の実態を忠実に描くものではなく、あくまで、作成した者のライフコースや人生での出来事に関する「興味関心の傾向」を探るといふことにとどまるといえよう。

② マスの記載内容や回数計測の厳密な意義に欠ける

人生すごろくは作成にかなりの労力が必要なため、熱心に取り組む学生とそうでない学生により、マス内の記述量の個人差が大きい。既述のように、ゴール設定は学生に自由に任せたため、結婚をゴールとしてその後の記述が一切ないものも、ゴールを自分の死去としているものもあり、記載された期間にはばらつきがある。また、たとえば子どもが小学校／中学校／高校／大学入学、といった内容はイメージしやすいため、マスの登場回数が増える。さらに、たとえば、何もないマスが多いすごろくがある一方で、すべてのマスにイベントの記入があるものもある。そのため、マスの記述内容と回数についての厳密な計算はそれほど意味を持たず、あくまでライフコースの展望や興味関心の傾向を探るにとどまるといえよう。

③ データとして活用できないすごろくが一定数含まれる

既述のように、人生すごろくの作成には個人の力量と熱意の差が反映される。そのため、完成品として提出されたすごろくの中には、ルート途中で止まる、マスの内容同士が矛盾するなど、データとしてカウントに活用できないものが一定数生まれる。個人ではなく集団で作成すれば完成度は高まりこの問題が発生する可能性は低くなるが、すごろく作りの得意なメンバーや意見を主張しやすいメンバーの影響が強いものとなりやすく、一人ずつの志向は反映されにくくなる。

④ 他者のおこなう研究との比較が困難である

人生すごろく作成をキャリア教育の一環として実践してきたいくつかの既存研究では、すごろくの内容について、マス数での分析がなされてきた。そのため、本研究でも、調査対象者の異なる既存研究の分析結果との比較を予定していた。しかしながら、たとえば1つのマスに「子どもが病気」とあれば「子ども」と「病気」の2つの出来事それぞれにカウントするのか、その場合総マス数と各出来事のマス数の比較(%)はどのように出すのか、など、マスの記述内容をどのようにカウントするかについての基準が詳細に明記されていなければ、他者がおこなった既存研究との比較は実際のところ困難である。

⑤ 内容分析のためのルール作成とカウントが煩雑である

実際のところ、マスやルートの数や内容によって分析を行うためには、マスやルートの数え方、記述内容の分類の判断などについて、明確な統一基準を作成する必要がある。しかし、すごろくを一つずつ確認する過程で、想定外の記入が見つかるたびに、分類軸の見直しが発生し、新たな分類軸に沿って再び最初のすごろくからカウントをし直す必要が生まれる。本研究ではサンプル数が少なかったため可能であったが、多数のサンプルだと対応は難しい。性別や年齢が異なれば記載内容の文章表現も異なってくるため、新たな分類軸が生まれる可能性がある。そのため、他者がおこなった既存研究とではなく、同一の研究者が行うとしても、マス数の正確な計測による比較は相当難しいことが予想される。

(4) 人生すごろくの教育効果を上げるための方策

上記のような問題点を鑑みると、人生すごろくは、作成者のライフコースに関する実態調査を目的とするよりも、あくまで、教育効果を狙うツールとしての使用が適切だと判断できる。その場合、より教育効果を高めるために、以下のような内容が考えられる。

① 事前ワークの分類を活かす

既述のように、人生すごろくに書かれていたマイナスな出来事の多くは、偶発的かつ外的要因による、自分で防ぐことの難しいものが大半であった。すごろくのゲーム的な要素を重視するためにより劇的な出来事のマスを作ろうとする、社会人や家庭人として生活する中でのリアルな心情を想像するのは難しい、外的要因による出来事のほうが一般論的で自分に原因が起因しないのですごろくのマスの内容として作成するストレスが少ない、といったことが理由として考えられる。内的要因に関わるマイナスな記述は、「仕事でミスして上司に怒られる」「育児と仕事の両立に悩む」「資格試験に落ちる」など、ごく少数のみであった。しかしながら、内部要因による出来事について考えることこそ、キャリア教育の余地と価値があるともいえよう。たとえば、「リストラにあう」という記述と関連して、「リストラにあった場合の対処」「リストラにあわないようにするための方策」を考えることができる。すごろく作成前の事前ワークにおいて、「起こってほしい・欲しくない」「自分の力が及ぶ・及ばない」で4分類して将来の出来事をリストアップしていたが、このワークを活用して、「自分の力が及び、起こってほしくない出来事」について、出来事の発生を防いだり状況を改善するためにはどんな情報や行動が必要かを考察し、その内容をすごろくに反映させることができるだろう。

② すごろく作成以前の関連内容の授業

①とも関連するが、女子大生にとって、母親など身近な存在から連想する他は、社会人また家庭人としてのリアルな姿はなかなか想像しづらい。メディアでは働く女性についての様々な情報も発信されているが、20歳前後の若い彼女たちにとってはそれほど現実味を帯びて興味を持っていないのも当然である。しかしながら、彼女たちにとっても、育休制度、マタハラ（マタニティハラスメント）、保活（保育所に子供を入所させるための活動）、ワークライフバランス、などのテーマはそれほど遠い将来の話題ではない。これらの関連内容の授業を事前に行い、現実の女性の姿に触れさせることで、「妊娠初期の体調不良で仕事継続が困難になる」「時短勤務かフルタイム復帰か選択する」など、マスやルートの記載内容にリアリティが増すとともに、自身の将来についてより深い検討が可能となるだろう。

③ ふりかえりシートの作成

完成したすごろくをもとにして分析するためのふりかえりシートの作成も意義があるだろう。たんに気付いたことを書かせる自由記述だけでなく、相対的にどのようなジャンルの内容が多いか少ないかを数値で計算する、それぞれの項目について記述があるかどうかのチェックする、など、客観的に特徴を検証できるような内容を含めたシートが効果的だと思われる。これにより、特に人生すごろくを個人で作成する場合には、自分自身の完成したすごろくの内容の内省と、他人が作成したすごろくとの比較が可能となり、自分のライフコース観の特徴を捉えたいうえでの気づき、将来への思考を促すだろう。

6. 今後の課題

今後の研究課題としては、人生すごろくをたんに授業内で作成することで完結させるだけでなく、学外の女子学生にも使用してもらえるような、アクションラーニングにつなげていきたい。外部の人間の使用にも耐えるような内容にするためには、原案としての個人作成を経るとしても、最終的にはグループでの作成がより適切であろう。グループで作成することで、すご

ろくの完成度を高める過程でキャリアに関する知識を幅広く収集し気づきを増やすこと、他者とのかかわりの中でキャリアに関して多様なものの見方を育むことが期待できる。

消費者教育やキャリア教育の分野では、公的機関が作成した様々なすごろくゲームが存在し、教育機関でも活用されている⁵。同志社女子大学や中部大学などで、オープンキャンパスや新入生オリエンテーションで、学生が作成した「大学生活すごろく」を活用している例も報告されている⁶。マスの記載内容やルート選択の工夫、添付資料の作成などにより、例えば、産休・育休の制度、女性に人気の職業の平均年収、関連する公的機関など、より情報量の多く、ゲームとしても魅力的なすごろくを作成する。女性に特化した人生すごろくを女子中高生に実施してもらう高大連携授業などにより、社会貢献を伴うアクションラーニングのプロジェクト実現を目指したい。

注

- ¹ 平成27年8月に、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（女性活躍推進法）」が成立した。
- ² 厚生労働省の平成23年人口動態統計月報年計によると、平均初婚年齢は夫30.7歳、妻29.0歳である。
- ³ 平成17年版の国民生活白書による。
- ⁴ 生活トレンド研究所レポート2015 vol.2 <http://corp.allabout.co.jp/corporate/press/2015/150219.html>
- ⁵ 第一生命「ライフサイクルゲームⅡ」、全国銀行協会「生活設計・マネープランゲーム」、独立行政法人労働政策研究・研修機構「キャリアシミュレーションプログラム」などがある。
- ⁶ 同志社女子大学情報メディア学科 <http://www.dwcmmedia.jp/archives/14002>
中部大学人文学部コミュニケーション学科 <http://www.3chubu.ac.jp/humanities/news/6536/>

参考文献

- 井上奈美子 (2008) 「気付きを生むキャリア教育～MBAホルダーを講師として～」『人材育成研究』第3巻第1号, pp.97-114.
- 井上俊也 (2014) 「若年層未婚勤労女性と女子大学生のキャリアに関する意識の比較」大妻女子大学紀要『人間生活文化研究』第24巻, pp.104-119.
- 神田道子 (1971) 「女子学生に対する進路指導の改善について」『産業教育』昭和46年12月号, pp.54-59.
- 加澤恒雄 (2006) 「現代日本における大学教育のパラダイム転換の必要性に関する一考察—『大学教育の中核としてのキャリア教育』論—」『広島大学教育研究開発センター大学論集』第37集, pp.131-147.
- 増田幸一 (1973) 「女子大学生における卒業後キャリア計画に関する調査」『進路指導』第46巻第2号, pp.21-25.
- 永田晴子 (2008) 「『人生すごろく』における女子短大生のライフコース展望—学生の職業観・恋愛観・結婚観・家族観にみる生活設計教育の課題—」『國學院大學栃木短期大学紀要』第43巻, pp.53-66.
- 長田尚子・藪田由己子 (2014) 「女性のライフプランニングを志向した授業実践—共通教育科目「女性とキャリア」の開発と評価—」日本女子大学現代女性キャリア研究所紀要『現代女性とキャリア』第6号, pp.89-101.
- 西川裕子 (2013) 「経済社会の変動と女子大学生の結婚観・キャリア意識に関する日韓比較研究—日本女子大学と梨花女子大学の比較を通して—」『現代女性とキャリア』第5巻, pp.73-83.
- 日本女子大学現代女性キャリア研究所 (2012) 『女性とキャリアに関する研究報告書』.
- 岡村貴子・上野顕子・斎藤美穂子・牧野カツコ (1999) 「生活設計教育における『人生すごろく』づくりの意義 (第二報) —中・高校生のライフイベントに対する意識—」『日本家庭科教育学会誌』第42巻第3号, pp.9-15.
- 斎藤美穂子・岡村貴子・上野顕子・牧野カツコ (1999) 「生活設計教育における『人生すごろく』づくりの意義 (第一報) —中・高校生のライフイベントに対する意識—」『日本家庭科教育学会誌』第42巻第3号, pp.1-8.
- 坂本麗香 (2014) 「女子学生のライフプランの現状と課題への提言—キャリア教育における人生年表作成の試みより—」『名古屋女子大学紀要』第60号人文・社会編, pp.55-68.
- 坂本麗香 (2015) 「女子短大生のライフプラン—四大大生との比較—」『名古屋女子大学紀要』第61号人文・社会編, pp.117-128.
- 社団法人国立大学協会教育・学生委員会 (2005) 『大学におけるキャリア教育のあり方—キャリア教育科目を中

心にー』

田和真希 (2012) 『女性のためのライフプランニング』 大学教育出版.

田澤 実 (2005) 「ライフ・キャリア・パースペクティブと将来イメージの関連—女子大学生が展望する仕事・家族・余暇の重みづけ—」 『進路指導研究』 第23巻第2号, pp.19-25.

上野顕子・岡村貴子・斎藤美穂子・牧野カツコ (2002) 「生活設計教育における『人生すごろく』 づくりの意義 (第三報) —生徒の職業観・恋愛観・結婚観・家族観の意識形成に関する有効性—」 『日本家庭科教育学会誌』 第45巻第2号, pp.109-118.

宇田美江 (2009) 「女子学生に焦点をあてたキャリア教育の必要性について」 神奈川大学紀要 『国際経営論集』, pp.175-188.

渡邊席子 (2010) 「大学生向けキャリアデザイン力育成プログラムに関する研究—人生すごろくを用いた総合教育科目向けのアプローチ—」 大阪市立大学紀要 『大学教育』 第8巻第1号, pp.53-65.